連載

中大生の旅するチカラ

観光ジャーナリスト
千葉 千枝子

世界が注目するマレーシアで グローバル感覚を身につける

人口が3000万人に満たないマレーシアには、異国の人を受容する優しい空気が漂う。多民族国家のゆえんだろう。そのため、リタイア後の移住先としても人気が高い。1990年代後半から積極的にリタイアリーを受け入れてきたマレーシアでは、2002年、最長10年間の滞在が許される退職者査証「マレーシア・マイ・セカンドホーム・プログラム（MM2H）」の制度を導入した。以来、多くの日本人がMM2Hを取得して、悠々自適にマレーシアでの暮らしを楽しむ。

そう聞くと、シニアの楽園のようなイメージを持たれるかもしれないが、近年では若い層からの注目も著しい。その理由の一つに、事実上の英語圏であることが挙げられる。マレーシアの国語はマレー語だが、早期から英語教育が行われているためにグローバル人材を数多く世界に輩出してきた。さらには、マレーシア人の4人にひとりが中華系ということもあり、マンダリン（北京語）を操る人も多い。当世のビジネスパーソン育成に、もってこいの土壌にあるため、留学などの教育分野も伸びている。

そのマレーシアは今、経済成長著しいASEAN東南アジア諸国連合の戦略的拠点を目指している。アセアン自由貿易協定による域内関税撤廃の動きは、ロジスティックス（物流システム）のみならず、ヒトの動きも加速させた。アジア中流層の爆発的な増加で気流に乗ったのは、首都クアラルンプールに本拠を置く格安航空会社エアアジアである。2時間もあればタイやシンガポールなど周辺国へ移動できる地の利にあり、世界第4位の人口を誇るインドネシアにもLCCブームを巻き起こした。ダイナミックなアジア大交流時代の一翼を、マレーシアが担っているのがおわかりだろう。

ペナン州観光大臣のYB ダニー ロー ヘン クラン氏（中央）を囲んで
経済学部長の谷口洋志教授（右）、鳥居伸好教授と筆者が左脇に

国教はイスラム教だが、中東ほどの厳格さはなく、ゆるやかで意外に感じる人も多い。

マレーシア政府が推し進めるハラル・ハブ政策は、世界で増大するムスリム人口の潮流を、うまく汲んだものといえる。政府直轄の機関が、ハラルと呼ばれるイスラム教義に則した食品の認証を行っており、ハラルにおける世界のハブ（枢軸）を目指している。また、日本の金融機関も注目するイスラム金融の中枢にもある。イスラム金融とは、イスラム法に則った金融取引をさし、教典・コーランの教えから利子を受け取ることをかたく禁じているが、あくまでも概念上のこと。利潤配当の仕組みが立派に存在しており、それらが巨大マネーになって流通しているのである。

このエキゾチシズム溢れるマレーシアで、2014年度、マレーシア政府観光局とペナン州観光局が中央大学の学生を受け入れて、観光分野におけるグローバル人材育成の新たなプログラムをスタートさせる予定だ。観光といっても、今やツーリズムは外縁を広げているから、貴重な経験を活かすフィールドは無限大の広がりをもつことだろう。

クアラルンプールから飛行約50分のペナンは、「東洋の真珠」と呼ばれる美しい島で、対岸のマレー半島とはペナン大橋で結ばれる。なかでも世界文化遺産のジョージタウンが、ホットな街として人気上昇中だ。かつてマラッカ海峡の北の玄関口として栄えたことからコロニアルな歴史的建造物が多く、街角には可愛いカフェやストリートアートが点在して旅心をくすぐる。そんなペナンでは、ジャランジャラン（マレー語で、まち歩きの意味）するのがおすすめだ。まだ知られていないペナンの魅力を発掘発見して、それらを醸成させる実践的なプログラムが予定されているから、ぜひマレーシアと日本、ペナンと中央大学を結ぶ架け橋になって、グローバル感覚を身につけてほしい。

略歴　ちば・ちえこ　観光ジャーナリスト。横浜商科大学講師。中央大学経済学部卒。著書に「観光ビジネスの新潮流」（学芸出版社）など多数。